

未来に発信

## 〈訪問介護の 魅力 を探求〉

# 「人生の大切な時期に寄り添う」

**超** 高齢社会に必要な不可欠なエッセンシャルワーカー「訪問介護員」。

「訪問介護」は、人の人生を支えるという沢山の魅力と誇りにあふれている。この職に対する社会的認識は、ある程度は確立されてきたが、この職に対するイメージはどうか。魅力を十分に発信出来ていないことから大変な仕事だというイメージだけが先行しているように感じる。日本の未来を担う子ども達が、将来なりたい職業の1つに「介護」が選ばれる社会を目指して、私たち訪問介護員に出来ることは何かを考察していきたい。

「訪問介護職の魅力は」と尋ねられると、私は「自分がこれまで培ってきた『学び』と『気づき』を活かし、人の人生の大切な時期を支えることができる」と説明をしている。

令和4年版高齢者白書では、日本の65歳以上の人口は、3,621万人。高齢化率28.9%と記されており、30%を超えるのも約3年後と予測されている。更にその先も高齢者は増加し、2055年には38%を超えるるとされている。在宅介護の抱えている人手不足の問題は、日本の福祉の根幹に係わる由々しき課題と言えるし、私たち現役の介護員は、在宅介護が途絶えてしまわぬように、この仕事の大切さとその魅力を十分に発信して次世代へと繋いでいかなければならない。

日本では、現在約1万7千種類の職業があり、約6,730万人の就業者が居る。その内、訪問介護員はおよそ51万人（訪問介護事業所数は、約3万5千事業所）とされている。

令和4年4月、11年振りに改定された『厚生労働省職業分類項目』によれば、訪問介護員は、「介護・支援の必要な高齢者・障害者等の居宅を訪問し、入浴・排せつ・食事の介助などの身体上の世話、掃除・洗濯・調理・買い物などの日常生活上の支援を行う仕事に従事するものをいう」と記されている。この説明は、周知されている事実だが、これだけでは物理的な側面での業務しか行わない者であるという認識が払拭できない。

「日常生活上の支援」というのは、いつも通りに過ごすという一連の行為や行動の支援であり、この「いつも」に私たちが介護を通してどのように携わるのかが問われている。利用者個々により環境や習慣など重きを置くところが当然違ってくるため、これらをしっかりと理解しなければ十分な支援は行えない。そして、これらを知るためには、観察能力や情報収集が欠かせないことはもちろんのこと、「利用者主体」や「尊厳」の視点を忘れてはならない。訪問介護員になるには、職業に就く前に必ず一定の研修を受講しそれらを学ばなければならない。これは、厚労省の定める人員基準により訪問介護員は有資格者\*1でなくてはならないからだ。

\*1. 訪問介護において必要な資格の例

介護福祉士、介護職員初任者研修、介護福祉士実務者研修、旧ホームヘルパー1～3級、介護職員基礎研修、認知症実践者研修、喀痰吸引等研修、生活援助従事者研修、介護に関する入門的研修 など



研修では、尊厳や利用者主体の他、介護の基礎知識や基本技術の習得をはじめ、人権、価値観の理解、QOLの向上、自己選択、自己決定、自己実現、個人情報保護、多職種連携、協働、記録などについて学ぶ。これは同じ介護分野でも、資格要件が必須でない施設勤務や通所施設などとは大きく異なる点である。

訪問介護は、介護サービスの提供を利用者宅にて基本的に訪問介護員一人\*2が行う。そのため状況に応じた介護サービスを一人で判断し行わなければならない。行う業務は、予め記されている訪問介護計画書や手順書に沿った支援が基本となるが、いつもと比べてどうなのか、利用者の体調の変化や気分等の観察、状況判断は、計画書などでは事足りないことも多々ある。その都度適切な判断力が求められその役割や責任は重大である。

このことから、一定の研修受講やある程度のスキルがないと勤まらないことが想像できるだろう。

今、「新しい資本主義」の実現に向けて政府が政策の一つに「リカレント教育」があげられている。リカレント教育は、仕事に生かすための知識やスキルを学び直すということ。日本は、諸外国に比べリカレント教育を受ける割合が低いこともあって、就業者の実践力の向上が求められている。無論これは介護に限った話ではなく、全産業における政策である。

私たちがいえば、新人研修、同行現場訪問、定期研修会、当会のような団体に所属し研修会や講習会で学ぶだけには止まらず、新たな資格取得をするなど専門的知識の習得や技術の研鑽に励むことが求められている。

だが何より大切なのは、そこで得た「知識」や「気づき」を現場でしっかりと活かすこと。私たち訪問介護員は、日々研鑽し、努力し、学んできたことや培ってきたノウハウ、洞察力を活かして仕事をしている。そして、それが利用者の生活の質の向上に繋がることを誰よりも身近に感じられる仕事である。これは訪問介護員にとって大きな魅力のひとつであると私は思う。

私たちが耳を傾けなければならないのは誰なのか。人生の最期をどこで誰と過ごしたいのか。

施設や病院を選択せざるを得ない状況を生み出しているものは一体何なのか。

人生の最期を妥協するのではなく、利用者や利用者家族が望むならば、最期まで住み慣れた自宅で過ごせるように社会全体で考えなくてはならない。

改めて、訪問介護の魅力とは、自分がこれまで培ってきた「学び」と「気づき」を活かし、人生の最期までその人らしく生きていけるよう支え、寄り添うこと。利用者の意向に沿った尊厳のある生活を利用者家族と共に支えているということにやりがいを感じる。その姿が周囲や子どもたちにどう伝わるのかは私たちの仕事のあり方次第である。

私たち訪問介護員は、今日も利用者の変わらぬ「いつもの暮らし」を支えている。

筆者：今岡 望 (いまおかのぞむ)

一般社団法人 CREDO / ヘルプケア・クレド

介護福祉士 / ホームヘルパー、ガイドヘルパー



\*2 重度利用者には、二人介護の場合もある。